しを　われ　くだり　あさこぐ　おほ　わたり　あしがらを（あしがら の海舟也）　あしわきを
あしかりを　こもかりを（もかりぶね）　よつの舟（唐使舟也）　おほみ　う　うかゐ　もろこ
し　ゑふ　あや　いつて（萬、伊豆より出舟也、）　あしはやを（島傳といへり）　かもといふふね（かもに似也、萬、をき
つ鳥かもといふふれといへり、）　見　むかへ（萬）　車（今様にも）　やふね　つまよぶ　つくし　さにぬりを
船（七夕）　さくらかはまきたる舟（櫻皮をまきたる也）　くほ（七夕）　や　とわたる　鳥　船でとはいづ
る也、萬にも出とかけり、　つばら〳〵（舟のかぢのをと也）

〔狂言記四〕ふねふな

とのやい、こゝにいかひ川がある、（略○中）　くわじゃ　是は神崎のわたしと申は、これで御ざりま
する、とのは是はかち渡りにはなるまひが、渡守はないか、くわじゃいや御ざりまする、とのあら
ばいそいでよべ、くわじゃ　畏て御ざる、（略○中）おういふなやい、とのやい、そこな者、わたしならば、
なぜにふねと云てよばぬ、（略○中）　くわじゃいや殿様に申上たい事が御ざる、あなたのつきば
と、こなたのつきばを、何と申まするぞ、とのそれな、ふねつきといふは、くわじゃさやうで御ざ
るによつて、おがつてんが參らぬ事で御ざる、ふなつきなどゝは申せ、ふねつきと申事は、ござ
るまい、それにつきまして、ふななどゝは古歌にも御ざれ、ふねと申古歌は、御ざりますまい、と
のいらぬをのれが古歌だてゞはあるまひか、さりながら、あらば申せ、くわじゃ畏て御ざる、ふ
なでしてあとはいつしかとをざかるすまのうへ野に秋風ぞふく、と申時には、ふなでは御ざ
りますまいか、

〔天工開物（中舟車）〕舟

凡舟古名百千、今名亦百千、或以形名（如海鰍、江鰏、山棱之類）、或以量名（載物之數）、或以質名（各色木料）、不可殫述、遊海濱者、得見洋船、居江湄者、得見漕舫、若局趣山國之中、老死平原之地、所見者一葉扁舟、截流亂筏而已、